朝日新聞
DIGITAL

地獄だった、から…「こども庁」唱えた女性、「家庭」の2文字に失望

有料会員記事

聞き手・久永隆一　2021年12月16日 10時30分

風間暁さん

これまで検討されてきた「こども庁」の名称は、児童虐待 を経験した一人の女性の訴えから生まれました。自らの体験を伝えながら、様々な社会的活動に取り組む風間暁さん（30）です。「家庭」という言葉を名称から外すべきだと考えた理由はどこにあるのでしょうか。話を聞きました。

「こども家族庁」への修正、自民が了承　「こども庁」支持する意見も →

―― 自民党 の会合で、「こども家庭庁」に改める政府案が了承されました。どう受け止めますか。

失望です。子どもたちをはじめ、当事者や専門家の意見を聞かず、大人、それも政治家だけがいる部屋で「こども庁」から「こども家庭庁」に変える話があっさりと決まってしまうのですから。

もし、こども庁から変える理由が、伝統的家族観を重視する保守派への配慮なら、あまりに横暴です。こども庁という名前そのものが、家庭と分けて、子どもという個人を尊重する大人や社会からのメッセージだと思っていました。子どもと保護者は別々の人格です。

――15日の会合では、名称変更の理由として「家庭が基盤で、家庭の子育てを支えることは子どもの健やかな成長に不可欠」という説明があったそうです。

「なぜ家庭だけをピックアップするの」

確かに、大多数の子どもは家庭を基盤にして育つでしょう。ほとんどの場合、子どもがまず最初に所属するコミュニティーは家庭ですから、健やかな成長には家庭支援は必要です。

でも、一部には家庭がない子もいます。家庭にこそ苦しめられている子も。こうした子のことを考えて、こども家庭庁にするのでしょうか。私は、この子たちに目線が合っていない名称と感じます。

――こども庁という名称は、風間さんが自民党の議連で話したことがきっかけで検討されてきました。

「家庭は地獄でした」。議連の勉強会に呼んでいただいて、私が受けた児童虐待の経験を話しました。それで、家庭という言葉を抜いて「こども庁」にしてくださいとも言いました。議員たちがそれを受け止めてくれて、その場で、子どもが読んでも分かるように平仮名にしようという声も上がり、「こども庁」ということでやっていくことになりました。

虐待の経験と言っても、人それぞれです。私自身は事前に、虐待を経験した人や子どもたちに意見を聞いて勉強会に臨みました。

――こども庁の名称のほうが良いと考えるのはどうしてですか。

こども庁は、とにかく子どもを第一に、子どもを真ん中に考えるというのが理念です。ですから非常にシンプルに、子ども中心の「こども庁」。どのような環境下にいる子どもも、家庭のない子どもだって、一人も取りこぼされてはいけませんから。

では今回、なぜ家庭という言葉が必要になるのか。子どものコミュニティーは学校も地域も習い事だってあります。その中で、なぜ家庭だけをピックアップするのでしょう。これだけを入れ込む理由があるはずです。

本来なら社会がもっと手助けすべきなのに、子どもと家庭にだけ責任に押しつける価値観が背景にあるのでは、と私の目には映ってしまいます。

私も保護者の一人です。 核家族 、共働き、 ワンオペ ……。近所の人が子育てを手伝ってくれる時代でもありません。今の現実と、かけ離れた感覚が、今回の名称変更を決めた人たちの中にないでしょうか。

――こども家庭庁をつくり、進めようとしている政策についての期待がありますか。

政府がまとめた基本方針に書き込まれた政策については肯定的です。様々な当事者や関係者から丁寧に話を聞いてつくっただけに、「こどもまんなか」で考えられています。

具体的には、「全てのこどもの居場所づくり」という項目があり、具体策が書いてあります。この言葉は、家庭のある子ども、ない子どもの、どちらにも向いています。家庭があっても息苦しい子どももいるわけで、どんな子どもも安心できる居場所を一緒に考えていく、「家庭ありき」ではないのを感じます。

ただ、家庭が基盤、第一の居場所という考え方で、こども家庭庁を動かしていったら、子ども中心の政策が実行できるのか、疑問を持ちます。

――今後、この問題にどう関わっていきますか。

「虐待サバイバー（虐待をかつて経験したことがある人）」の仲間や子どもたちと連絡を取り合っています。なんとかしたい。諦めずに行動し続け、今後、名称をひっくり返せたらと思います。「こども会議」とか

をやりたい。この件について子どもがどう考えているか、聞いてみたい。当事者はどう考えているか。そこに立ち返りたいです。

この名称の問題ひとつにしても、子どもも議論に参加する権利がある。大人は私たちの意見を聞いてくれない。そう思ったら、将来、投票にも行かなくなるでしょう。（聞き手・久永隆一）

◇

かざま・あかつき　文筆家 、写真家、 保護司 。常設の 子ども食堂 で、マイノリティーが安心して過ごせることをコンセプトにつくられたカフェ「ごちゃまぜCafeメム」のオーナー。

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.